

鹿児島の植物34

豊かな鹿児島の森をつくろう

植物担当 寺田 仁志

森の役割

森には様々な機能があります。

暑い夏、葉に蓄えられた水が水蒸気なることによってひんやりと空気を冷やしてくれます。火事の時にはこの水のカーテンによって火の勢いを弱め、延焼を防いでくれたことは、関東大震災や阪神淡路大地震の時などにも検証されています。

また、葉が繁って複雑な空間を作っていることで音が吸収され、静かな環境がつけられます。ほこりっぽく、汚れた空気も吸収され、酸素分の多い清浄な空気に変えてくれます。

学校などの施設が森に囲まれていると、避難所としての機能を増し、かつ、ほこりっぽい空気をきれいにし、また静かな環境をつくり出し、住民のいのちと健康を支えてくれるのです。

色々な植物が生え、様々な生き物が宿る自然の森には、季節により様々な生命現象がみられます。自然の教材としても、また、日々営まれる自然の変化を見つめることにより、人々の心や感性を磨いてくれ、地域・学校などで果たす役割は大きなものがあります。



植林15年目の森

従来から行われてきた植林

鹿児島の自然林の中では20m四方の面積であれば、40～60種の植物種を見つけることができます。このうち樹木は20～35種にもなります。

ところが、鹿児島で行われている植林の多くは、森をつくると言いながら材をとるスギやヒノキだけを植えたり、鑑賞のためのカエデだけを植えたり、あるいはそれが油をとるツバキだけだったりします。

また、植林後、木を効率よく伸ばすために、雑草やよくのびるアカメガシワなどの先駆種を刈り取ったり、効率よく成長する木を残す間伐をしたりする管理を行い、人の手をいつ

までもかけています。

その結果、森は人工的で単調なものとなり、そこに住む生きものの種類も少なく、潤いの少ないものになっています。

鹿児島の森をつくってみませんか。

森をつくっている植物は環境によってその構成は違います。海岸付近であれば潮風に強いヤブニッケイやモクダチバナなどが、尾根部であれば乾燥や栄養のない環境に耐えるスダジイやヤマモモなどが、谷部であれば、水と栄養分に恵まれよく伸びるタブノキやイチイガシなどが森の王様になっています。

鹿児島の自然にあった森をつくるには地域の自然植生を調べ、環境にあった樹種20種～30種を組み合わせ、1㎡に3～4本という高密度で植えます。高密度で植えることで環境を和らげ、樹木どうしの競争によって成長を促すのです。

植える木々も大きな木を植えるのではなく、3・4年生のポット苗を植えるのです。ポット苗は細根が発達して、植えてすぐに発育が可能だからです。植えた後、稲ワラ等で土を覆います。このことによって土が流れたり、アカメガシワなどの先駆種



ポット苗の混植・密植



の侵入を防ぐのです。

その後1・2年は蔓植物の侵入を除去したりしますが、

稲ワラによるマルチング

その後は手もかけず自然のまま放置します。樹木たちは互いに競争しつつ我慢しあって、お互いに折り合いをつけながら成長を続け、10年もしないうちに森がつくられます。

これまで、霧島市で既に5回ほど鹿児島の森づくりが行われ順調に成長しています。